

## 《 北海道 》

第 61 回北海道音楽教育研究大会 旭川上川大会

全道共通主題 「音楽のよさを生かし、豊かな心と確かな力を育む音楽教育」

大会主題 「音楽のよさや美しさを感じ、  
音楽と豊かに関わる力を育む音楽教育の創造」

～音とつながる 心がつながる 生活とつながる～

令和元年度の北海道音楽教育研究大会は、旭川市で行われ、旭川市立神居東小学校、旭川市立東明中学校、旭川市民文化会館の3会場で3つの部会6本の授業と音楽集会、音楽交流が公開された。

### 1. 大会主題設定の理由

平成25年度の旭川大会以降、旭川上川地区では、多様な音楽のよさを深く味わい、学び合う仲間との創意工夫や感動体験の共有を目指して多くの授業実践を積み重ねてきた。

〔共通事項〕を効果的に位置付けた学習の展開や一人一人が思いや意図をもって音楽活動に向かう姿など、子供の姿から一定の成果を伺うことができた。しかし、実践を重ねていく中で、「表現をこうしたいという児童生徒の思いはあっても、表現としての高まりにつながらない」という姿や「言語活動として音や言葉で伝えあうことを大切にしたいあまり、授業の中で音楽や音楽活動に十分に浸ることができていない」などの実態が課題として浮き彫りになった。

そこで、本大会では、これまでの研究の成果や全日音研、全道音研の成果を基盤とし、今回の学習指導要領の改訂を踏まえた上で、「音楽に親しむために必要な知識や表したい音楽表現をするために必要な技能の習得」や「音楽のよさや楽しさを仲間と共感・共有し、表現する喜びを実感できる授業づくり」を目指していきたいと考えた。

目指す子供の姿を「音楽を知覚・感受する力を伸ばし、他者と協働しながら、表したい音楽表現を生み出したたり音楽のよさなどを見いだしたりして、音楽と豊かに関わる力を身に付けていく子供」とし、本大会主題を『音楽のよさや美しさを感じ、音楽と豊かに関わ

る力を育む音楽教育の創造』と設定した。また、サブテーマとして、『～音とつながる心がつながる 生活とつながる～』を置いた。

教科の指導に当たっては、育成を目指す資質・能力の三つの柱の習得、育成等が偏りなく実現されるよう、題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが重要とされている。

音楽科においては、「主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で授業改善を進めることが求められる。」（小学校学習指導要領解説音楽編P103、104より）と例示されており、音楽的な見方・考え方を習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげていくことが求められている。

一連の学習や音楽活動において、様々な「つながり」が学習や活動の支えになると考え、『音とつながる』『心がつながる』『生活とつながる』をサブテーマとして設定した。『音とつながる』とは

自ら音や音楽に関わり、音や音楽の魅力（よさ、美しさ、面白さなど）を感じ取ったり、自分の考えをもって音楽と向き合ったりと、豊かに音楽と関わる力が育成されることを願ったものである。

『心がつながる』とは

仲間を大切にしながら学び合い、音楽活動を楽しむ豊かな心が育成されることを願ったものである。

『生活とつながる』とは

音楽活動を通して、生活や地域社会との結びつきを感じ、様々な音楽活動に広く触れようとする豊かな心が育成されることを願ったものである。

## 2. 研究の内容

目指す子供の姿である「音楽を知覚・感受する力を伸ばし、他者と協働しながら、表現したい音楽表現を生み出したり音楽のよさなどを見いだしたりして、音楽と豊かに関わる力を身に付けていく子供」の育成を目指し、以下の3点を視点として研究を進めることにした。

### (1) 音楽と豊かに関わる力を育む指導計画の工夫

- 表現と鑑賞を効果的に関連させた指導計画の工夫
- 題材で扱う〔共通事項〕を適切に位置付けた指導計画の工夫
- 我が国や郷土の音楽に親しみ、よさを味わわせる段階的な指導計画の工夫

### (2) 協働的に学び、音楽と豊かに関わる力を育む学習活動の工夫

- 思いや意図に合った表現や発想を生かした表現を実現するために必要な技能を習得する学習活動の工夫
- 互いの考えや音楽表現のよさを共感・共有し、音楽の捉え方や感じ方を広げる学習活動の工夫
- 見通しをもち、主体的に音楽活動に向かうための指導方法の工夫
  - ①教材選択の工夫、掲示物や教具、教材の工夫、楽器選択の工夫など、教材や学習環境の工夫
  - ②友達と教え合う時間の設定や手だての工夫、実態に応じた適切なアドバイスや賞賛など自信をもって音楽活動に向かわせ

る展開や教師の関わりの工夫

- ③模範を示す、活動へのきっかけとなる映像や音楽の視聴など見通しをもたせる活動の工夫など

### (3) 学びを深め指導に生かす評価の工夫

- 学習場面に応じて的確に評価できる場面と具体的な姿を明確にした評価の工夫
- 評価規準に基づく個に応じた働きかけの工夫

## 3. 研究の成果

### 研究1

- ・本時までに打楽器の音色、正しいリズムや奏法などに対する知識や理解を深めてきたことが、音色やリズムに着目しながら打楽器の演奏を楽しむ本時の子供の姿につながった。(小・音楽づくり)
- ・前時で学習した「美しきロスマリン」のはねるような旋律の形ではなく、流れるような「白鳥」の旋律を動画で見ながら鑑賞することで、子供たちが感じていた「なめらかな感じ」が旋律の流れと結び付き、曲想を味わって聴くことができていた。

(小・鑑賞)



### 研究2

- ・子供たちがなるべくたくさん友達と音あそびができるよう、活動の時間を保証したことにより、打楽器の音色やリズムに浸り、音を通した友達とのやり取りを存分に楽しむことができた。(小・音楽づくり)
- ・実物のチェロを提示することで、鑑賞する曲がどんな音色で演奏されるのかを予想し、本時で鑑賞する曲への期待感を引き出していった。(小・鑑賞)
- ・曲名を伏せて楽曲を鑑賞することで「優雅に水の上を泳いでいる感じがするから白鳥だと思う。」「なめらかに感じたから。」と、子供たちは、楽曲を感受した根拠を感受の言葉として表出していた。(小・鑑賞)

- ・導入部分では、前時に録音した自分たちの合唱を聴いた。「歌詞の言葉の意味が伝わるか」を検証していく中で、「まだ、自分たちの思いが伝わる歌にはなっていない。」という思いを引き出し、子供たちの思いから「表現を工夫しよう。」という本時の課題を確認し、一人一人が表現の工夫の考えを楽譜に書く活動に入った。(小・歌唱)
- ・小グループでの交流を行った後、学級を2つのグループに分け、リーダーを中心にグループ活動を進めていた。この活動では、それぞれの小グループから出された表現の工夫を実際に歌いながら試し、互いの表現の工夫のよさを感じ取りながら、何度も試す姿が見られ、音楽のよさを分かち合う姿が見られた。(小・歌唱)
- ・授業の終末では、グループの工夫した表現から学級全体の工夫を整理して全員で歌い、録音をした。それを聞き、自分たちの思いが伝わる表現になっていたかを確認することで、本時での学びを実感し、表現の工夫のよさを味わうことができた。(小・歌唱)
- ・生徒が意見を交流する際、音楽の経過をシークバーとマグネットで示したり、音色や旋律の動きについて、楽器の写真を用いるだけではなく、オノマトペや図形で板書したりするなど、視覚的に共通理解を図る工夫がされていた。これらの工夫は、「心がつながる」に関わって、音楽のよさや美しさを仲間と共感・共有している姿を実現するために有効な手だてとなった。(中・鑑賞)
- ・グループ活動では、歌い方の工夫を可視化できるように、拡大楽譜を用意し、グループのアイディアを書き込むことができるようにした。さらに、工夫のポイントがまとめられたヒントカードを掲示することで、生徒の視点が広がっていた。また、自分たちが考えたアイディアを試しながら、何度も歌う姿があり、その繰り返しによって、歌

い方の工夫について思いをもつことができた。(中・歌唱)

- ・グループ活動後には、全体でグループごとの発表があった。工夫のポイントを説明してから歌い、聴いていた生徒がどのように感じたかを発表した。こうすることで、自分たちの工夫が他者へ伝わるものであるかどうかを確認することができた。最後には、自分たちで考えた歌い方の工夫で、「大切なもの」を全員で歌い、本時の学びを実感することができた。(中・歌唱)

### 研究3

- ・全体交流の場では、「いっしょに遊ぼうと話しかけられて、いいよって答えている感じだからお気に入り。」「金属でできている楽器同士だから合う。」などと、「お気に入りの理由」を音色やリズムを根拠に、ワークシートにまとめることができた。(小・音楽づくり)
- ・導入では、生徒が前時に学習シートに記入していた言葉を使いながら、前時の場面についての学習内容を振り返った。また、授業の中盤でも、前時における生徒の言葉をもとに問い返す場面があり、授業者が一人一人を丁寧に見取りながら授業を進めていた。(中・鑑賞)。